
王様と喪女・改

舘野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女・改

【Nコード】

N5607Y

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？結婚は政略と考えている王と、ちよつとずれた女性の周囲を巻き込んだラブ・コメディー。

以前投稿していた「王様と喪女」の全面改稿版です。

001 喪女の身の上

よし、これが打ち終わったら、すぐに家に直帰するぞ。

わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の二割り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、よく言えばナチュラルメイク。

一応眉の手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。

髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだというのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味が睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとっても垢抜けなかった。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太ってみられるし、服選びは大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがつたら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、ごめんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみません」

会社の営業の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわたしはせっかくのお誘いを断ってしまった。……本当

は大した用はないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言うてくるけど、たぶん内心では気を悪くしているだろう。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知っている。

「あの子もこんな機会でもなきゃ、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからいい付き合いができるかもしれないしね」
うっかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を煎れてるときに、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人に話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人わたし胸が大きいのが気に入ったらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会った方がいいのかもしれないけど、接待とか苦手だし。わたしにはお茶出しとかがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかでごまかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人にうまく対応できるとも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちよっと、いやかなりへこむかもしれない。それでもって、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけだ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしれないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避することに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだったからだ。

確かにわたしには恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるもてない女 喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

今までに異性を紹介してくる相田さんみたいな人もいたし、知り合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事なことがあったのだ。

「よし、下描きまでは完成ーつと」

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらってOKが出たところで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下描きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやっぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかったし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下描きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ!」

二十七の女の叫び声として、これはどうかと思うが、本当に痛いのではない。

人間、とっさの時にはつい地が出てしまうものだ。

だが、原稿一式は死守。

どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまつてあるし、あんなふうに散らばることはないはずなのに。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさるうとした。……がなんだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜかいかにも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

どこだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

いつたい、なに？　なにが起こったの？

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うのなら海外とかにテレポート？

もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリックプってやつですか！？

002 無茶な要求

高価そうな馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やっぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失っていると、美形は「答えろ」と厳しく言ってきた。

目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じゃなければだけど。

「工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています」

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻ってる。それでも通じないのか。

やっぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまった。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚だというなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だったが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。……おまえはまったく行っただけの大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまった。

アメリカに行って、日本語が通じないのと一緒にだ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他的大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい!？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまった。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらうわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだった。

「す、す、すみません！」

これって、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃったってことだよな。

わたしは頭を下げて美形に謝ったけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思って頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だって嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

この人がせつば詰まっていることは感じられたけど、やっぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそうだし、女の子もよりどりみどりそうなのに。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

はい？ この人今、姫って言った？

姫って、貴族とか王族の女の人だよね？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫って……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……って、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかった。

だって、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたってこと！？

是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃったり、最悪の場合、国家同士の繋がりのお金を駄目にしたってことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによってわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちゃったんだよーっ！

003 とりあえず着替える

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言っていないぞ」

わたしが王様に必死になって頼むと、彼は啞然とした顔になった。

……あれ、違うの？

いや、だってさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだった国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だったら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまったし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言っているだろうが」

わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。

いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁になんて、きっと

国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろが

さつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侶なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちよつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜつたい、絶対だよ！！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるといふピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええつ、ちょっと、ちょっと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、侍女の一人に台の上へ横になってくださいと言われて、すでにやけくそになっていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちよつと酷いんだよね、と言ったらそこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さっきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、エステってこんなのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですのね」

侍女の一人が感心したように言う。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女もいるし、これはお世辞だろうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からない。みんなこんなものじゃないの？

全身マッサージも終わって、ちよつと休憩と言うことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちよつと地味な素材はないの？　せめて着る人に衣装は合わせて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえっ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……っか、これを着るのか？　普段だらけだった生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

004 超非凡な友人

着替えさせられたわたしは、さっきカレヴィ王がいた部屋へ戻らされた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だって彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑った。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、でもやっぱり間違いない。

「ち、千花っ！？」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にそんなことになったんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言うと、困ったように頬に手をやった。なんというか、どこことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィ王とおじさんに頭を下げる。
「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどこなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻屑目を引いてもとっても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいか違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だっというのに堂々としている。
ひょっとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでいたし。

すごい。すごいよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合うのでさえ、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだったのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハル力が突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだった。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまっている。どうしたらいい」
ええ、そんなにせっぱ詰まっているの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもらうことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええっ!?

カレヴィ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待ってよ、わたしはそんなこと納得してない！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちよっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなったんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないって約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになりそうだけど……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなっていく……。

「そんなあ……。わたし、せっせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員ってことにするよ。給料も今よりはるむし」

「ええっ、本当！？」

思ってもいない千花の言葉に、わたしは色めきたってしまった。なんだ、そんなんだったら大歓迎だ。

それにしても、魔術師ってそんなことまで出来ちゃうの？

っていうか、会社設立って、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。
「ええー、それなら結婚するー！」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来ない。
…… ああ、この先には充実した生活が待っているんだね。

訪れるだろう近い未来を予想して、うっとりするわたしをカレヴ
イ王とおじさんが呆れた顔で見えていたけど、わたしはそんなことに
構ってなかった。

…… 多少問題ありだけど、趣味に浸れるってすごく素敵じゃない？

005 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしただけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……。はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィ王とそうなっちゃってもいいんじゃないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてると思ってるかもしれない。

まあ、成り行きつちや成り行きだけど、結婚するんだったら、こっちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよな。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……でも、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……

今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かったぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てっきり二十歳そこそこか……」

っていうことは、カレヴィ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になるなら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよな。

「ああ、それはないですから。わたしはとっても清らかですよ。なんといっても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張って言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすごく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳ということにさせてもらう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言ってた男を知っている云々と言ってくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願いします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらない」

今まで気が付かなかったけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていけなくちゃならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそうつまい話は転がってないよね……。

そう考えながら深く溜息をついているわたしにカレヴィが言ってきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しろ」

「うん」

カレヴィからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。

カレヴィがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。

「これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばったりの政略結婚だというのに、わたしの心配までしてくれて、カレヴィなんだかかんだってもいい人だなあ。

……うん、この人とならうまくやっていけるかもしれないかと、わたしは少しだけ安心した。

006 王弟殿下

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃないから、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰ってはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かって、心の準備がまだできていなかったわたしはちょっとほっとした。

「ハルカが心配することはなにもないよ。お二人とも気さくな方だし」

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちよっと安心した。

でも一人、会わなきゃいけない方が残ってるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になった。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきゃいけないだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちよっと心配だ。なんでも気難しいって言うし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。こういうのは早い方がいいかな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていったし

まった。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィが笑った。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言ったが、おまえはなに心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

堂々って……、ついさっき決まったことなのに、そんな無茶な。わたしが不安な面もちでカレヴィを見てみると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィよりも年上なんだけど……。

そんなことを思っているうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻ってきて、程なくシルヴィ殿下がお越しになられます、と伝えてきた。このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思ったら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思った。

それからすぐに、シルヴィ王弟殿下が来られたということで、わたしは一気に緊張してしまった。

執務室に入ってきた人は、カレヴィと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だった。

褐色の肌のカレヴィと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知ったことなんだけど、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となった娘をおまえに紹介したいと思っ
つてな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳ということにしてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙っていられなかったらしく、少々怒りを含んだ口調で言ってきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だったのは、ディアルスタンの王女では？ この方は他の大陸の方に見受けられますが。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ディアルスタンとの縁談は残念ながら破談となった。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」
「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか気乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは気がついてしまった。

わたしを王妃にとカレヴィが言ったのは、最初は腹立ち紛れからだっただけかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になったみたいなのは、わたしが千花と友達だったからなんだ。

たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そっか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じゃないと分かってしまってたしはなんだかがっかりしてしまった。

そりゃそうだよな。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。でも、元々が喪女だったわたしだ。

わたし自身に期待されないことは慣れきっている。

それでなんとかわたしは気力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願いします、殿下」

こっちの礼儀作法はよく知らないので、彼に笑顔で握手を求める
と、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはとうが立ってますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にもてなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。

あれ、わたしまた変なこと言ったかなあ。

そしたら、カレヴィが渋い顔をしてわたしに言ってきた。

「ハルカ、そんな余計なことは言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィにそう言っていると、シルヴィ殿下は困惑したように言った。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言うことももつともなので、わたしはあっさりいつもの言葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせてもらおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにつこり笑うと、それまでいくらかうろたえていた彼がほっとしたように笑った。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィがい

かなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。挙式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」

ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、国民に近々挙式するってことを知らせてあるんじゃないやっぱ
り駄目なのかなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきすぎたかもしれない。

などと思っても、後悔先に立たず。

ちよっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり
笑いをしていた。

007 カレヴィ突撃？

「そんなに早く？　ちよつと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきゃならないわたしはカレヴィに食い下がった。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。

「会社をすぐに辞められるか分からないし、そんなに急に王妃になるのも、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に付くとは到底思えない。

「はるか不安は分かるよ。準備するにもちよつと期間が短すぎるものね。……カレヴィ王、その辺りはどうにかならないのですか？」

わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィに交渉してくれる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にあることを知らせてしまっている以上、なるべくなら日程は変更したくない」

「……そっか、そうだね」

カレヴィにはつきりと断られてしまつて、わたしはちよつとがつくり。やっぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行ふ。なんならおまえの勤め先には俺から説明するが」

「え……」

カレヴィの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。いやでも、みんなにカレヴィなんて言つて説明するの？　真実を正直に話したら正気を疑われかねないし。

「でも本当のことを話すわけにはいかないでしょ？　そこはうまく脚色しとかないと。それにカレヴィ、向こうのこと全然知らないで

しょ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言うと、ちょっとカレヴィはむっとした。

ありや、機嫌をそこねちゃったかな。

カレヴィが好意で言ってくれてるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せっかくこう言ってくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやっぱりやめた方がいいかもしれないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだった。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていってその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ ってみんなに見せることになるんだよね。

今までもてなかつたわたしが突然イケメンを連れていったらどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心していい。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言ってくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするように言った。

「兄王がこう言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持って兄王に任せておけばいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでこう言われちゃもう反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穏便にことが済めばいいなあ、とか思ってたけど、これはちよつと無理っぽい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろう。とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言っても間に共同スペースみたいなものがあって、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。

千花はその能力でいろんな国に行っているらしく、この世界のことを知るに当たって、すごくいい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まっていきたいんだけどいい？」

千花がそう言ってきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしぶりに千花とお泊まりかあ。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろう。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィをカレヴィが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言ったら、なぜかカレヴィがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいこともあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハル力はこちらに住むということとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけど。

とは、思ってもわたしは口に出さなかった。

それを言ったら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィ達の様子はちょっと気にはなったけど、わたしは目の前の千花とおしゃべりのことについて、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみだなあ。

これから気の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

008 召喚の真相

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といた。

で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしている、友達の水着でも惚れ惚れする。

出るところは出て、手足は細くて長いっていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっとうろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは実は嘘なの。わたしは、わざとあそこにはるかが現れるようにし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィが結婚するようにし向けたってこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実にも呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

なにに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かった。なにを隠そう、今わたしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にもものすごく興味を引かれてしまった。

「詳しく聞かせて」

わたしは千花に詰め寄って肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想っていてね。そのうちディアルスタン国王に思い切って結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず気の抜けた声を出してしまった。

だって、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦っただろう。

下手したらそれって、二人の愛の逃避行フラグだよ。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかったから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃったのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせっつかれて、そろそろ結婚しないともまずいと思ったらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言うてくるくらいだもんね。それくらい平気でするよね」

まあ、あの時のカレヴィは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目の前で駄目にされて頭にきてたんだろうけど。

それにしても、カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかったってことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たって相手のこと少しくらい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲くらい分かりそうなものだけだ。

そしたら、さすがにカレヴィもリリーマリー王女と婚約しようとはしないはずだ。

「それで今回、リリーマリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてただけど、婚礼契約書にカレヴィ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに目を付けたの」

「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」
「突然召喚されてきたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じゃないかなと思つて。それにはるかなら、カレヴィ王とうまくいくかもしれないなつて思つたし」

「ええっ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。

わたしとカレヴィならうまくいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィ王に手を出させるつもりはなかったんだよね？ それだけは信じて」

まあ、それだとカレヴィが可哀想すぎる気もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言うと、千花はちよつとうろたえた。……図星かあ。確かにわたしも一生一人でも別にいいと思つてはいたけどね。

そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちよつと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思つたんだ。本当にごめんね、はるか」そう言うと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かったし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言うと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互いに信頼関係が築けたところで本当の意味での結婚生活を送ってもらう計画だったそうだ。

でも、どうしても反りが合わないそうだったら、婚約話を白紙に戻すつもりだったとも言っていた。

……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？　なんだかカレヴィがいいように利用されてるみたいでちよつと可哀想な気がする。カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようつていうんだからお互い様かもしれないけどさ。

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になつてしまったわけだけど。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やっぱりこういうのはフェアに行かないとね。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これ

からのことを話していた。

「とりあえず、一回家に帰って事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるって言わなきゃいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことで、わたしはちよつと癖のある両親の説得に千花という味方を得られて、かなり心強かった。

うちの両親は千花の言うことならたぶん信用するだろうし、それにいざというときには千花に魔法を披露してもらえばいいだろう。

「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくって言ったら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは執務とかでいろいろ忙しいらしいんだけど、でもわざわざそう言うってくるのは、かなり気を遣ってくれてるんだろうな。

「どうしても必要だったら出てきてもらうかもしれないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらって理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかった娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよ。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたって言ったら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえなさそうな気がするの
は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかったことは職場に浸
透しているしさ。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

おお、力強いお言葉。カレヴィがそう言つと、なんとなく可能な
気がしてくるから不思議だ。

「そう？　じゃあ、そうしようかな。カレヴィ、その時はお願いね」

「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手
が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいた
のがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だったからとい
うのは理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつづ
も、わたしはとりあえず帰宅することにした。

009 おとんとおかん

千花の異世界移動魔法でこちらの世界の自分の部屋に移動してきたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのにな、いくら外見に頓着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替え終えたわたしは、家の鍵とバックを持って家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るってのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日いなくなってたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「……ただいま」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛び出てきた。

「……はるか？」

おお、素早いな。……一応わたしのこと心配してくれてたんだらうか。

「連絡もしないで、今までどこ行ってたの。携帯は通じないし、まったくあんたって子は。頼みたい用事があったのに」

……なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこういう仕打ちは幼少から受けているけど、やっぱりちよつと落ち込む。

……まあ、いい加減、わたしもこういう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。

でも、理性では分かっているけど感情が付いていかないことであるでしょ？

それがまさにこの時プチ爆発して、わたしはむっとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいると、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかとはわたしの家に泊まってたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行っていることになってるからね。「まあ、千花ちゃん、また綺麗になって。いつ帰ってきたの？」

近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会って、おかんはころりと機嫌がよくなった。

……ちよつと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。

「つい、夕べです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃったんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしょうがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らうとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよ！」とリビングに戻っていった。

……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しすぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけださ。

「……おばさん、なんというか相変わらずだねー……」

千花が同情するように言ってきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた気がして、非常に情けなかった。

「……それにしても、ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかったね」

千花が眉を下げて申し訳なさそうにわたしに謝ってきた。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいえ、連絡の一つもすればよかったな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だったなと思う。

まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がったよ。千花には説明頑張ってもらわないといけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上がると、わたしの後に付いてリビングに入った。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちょっと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。夕べははるかをお借りしちゃってすみませ

んでした」

「うん、いいんだよ。こういうことがないとはるかは家にひきこもってるんだから」

……おとももなにげに毒舌だよね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょうね。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口ごもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。

「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ」

すると、おとおかんがうるんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言うことを二人が信じられなくても仕方ない。

「本当です。あの変なことを言うと思われるでしょうけど、聞いてください。はるかには異世界の王様の花嫁になることになりました」

この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん？ どうしちゃったの？ はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言うなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

術師をしています」

見てください、と千花は言うと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言ってたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになって見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取っても不思議じゃない。

「違います。言うなれば、魔法使いですね。……よく見てください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぽかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくても無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかった。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻ってくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じった目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対して強く頷いて言った。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらっていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください」

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきゃ」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は呆然として今は使い者にならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもしれませんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かつて右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだった。

すっかりよそ行きの格好になっている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「こ、これはいったい……」

「千花ちゃん、どうなってるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいと狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここはどこだろう……？

010 カレヴィとの両親の謁見

千花に連れられて来たところは、今まで一度も見なかったことのない場所だった。

……まあ、もっともカレヴィの執務室と居室、その間の共同空間と王妃の部屋くらいしかまだ行ったことないんだけどね。

もう少しわたしもこの王宮の間取りを覚えた方がいいかもしれない。

とは言っても、この中はとんでもない部屋数らしいんだけどね。でも、所要な施設の場所くらいは覚えた方がいいだろう。

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなったところにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。ひょっとしてあれは玉座だろうか？

「ここは……？」

わたしが疑問を口にするのと、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほど納得した。

この謁見の間は絢爛豪華ではあるんだけど、不思議と下品な感じはしない。それは所々置いてある品のある調度品のおかげかもしれない。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

玉座の上からカレヴィが声をかけてくる。それにわたしは頷いた。

「うん、そう」

うん。こうしていると、カレヴィ、確かに王様らしく見えるね。

なんというか、王様！ というオーラみたいなものがある。そこで初めておとんとおかんは我に返ったらしくて、見慣れない

豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていた。

「そうか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「は、はあ……」

威風堂々としたカレヴィに対し、おとんは気の抜けた返事をした。……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の花嫁になるなんて訳の分からない状況になったわけだし、この反応は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかんにいたっては呆然とカレヴィの端正な顔を見つめているだけだった。

「ハルカ、隣に座れ」

おとん達と一緒にいたわたしは、カレヴィに隣の席を示されてちよつと驚いてしまった。

だって、あれって王妃の席じゃない？ わたしはまだ王妃になってないぞ。

「え、いいの？」

「構わない。おまえは一月後には俺の妃になる。遠慮するな」

そう、それじゃ遠慮なく。

わたしはカレヴィの言葉に従って、一段高くなったところに上がり、カレヴィの横の豪華な椅子に座った。

そしておとんとおかんの方に向くと、二人は信じられないものを目にするかのように、並んで座っているわたしとカレヴィを呆けて見ていた。

それを千花がちょっと離れたところで様子を窺っている。

異世界に来てしまえばもうこっちのものだし、大体おとん達を説得できたも同じだから、千花には感謝だね。

「今言った通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらもそのつもりでいてくれ」

「……はあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……そういうことですから、今現在のはるかが勤めている会社は辞めてもらうことになります。その代わりと言ってはなんですが、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員とすることになりましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぼかんとするおとんとおかん。結婚しているといつても、まだ二十代の千花が会社設立っていうのは驚愕に値するのだろう。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかは王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろうな。

千花にも変な負担はかけたくないし。

でもそうになると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かってないけれど。

まあ、それは後でカレヴィとか侍女長のゼシリアに聞けばいいか。「……ハルカの父母はなにか言いたいことはないか？ あれば答えるが」

カレヴィのその言葉に、おとんははつとして言った。

「お、恐れながら、どうしてもはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ この娘は容姿は普通ですし、性格も決して気の回る方ではない。友人には恵まれています、そう社交的でもない。それなのに、な

「ぜですか」

すると、今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもつと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによってこんな娘なんですか？ わたし共にはとても理解できません」

……二人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。二人が普段わたしのことをどう思ってるかよく分かったよ。

わたしが思わずむっとしてると、カレヴィが椅子の肘掛けに置いてあったわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハル力を選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィが威圧的にそう言つと、おとんとおかんはかなりびびったようだった。そして、それ以上言う気もなくなったようで、口を噤んでしまった。

「……もうこのことに対する意見はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハル力の父母は別の間で休むように。……ハル力、来い」

わたしは席を立ったカレヴィに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

彼の表情をそつと窺うと、顔が険しい。

……なんか、カレヴィ結構怒ってるみたいなんだけど。

ひょっとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掴まされたとでも思っているのかなあ……？

それだと、王妃業の傍らに興味三昧の生活が泡になって消えそうな気もしたけど、でもわたしが千花とザクトリアの繋ぎということがあるから、カレヴィも王の立場からしたら簡単には婚約は取り消せないはずだ、……けど。

……うーん、困ったなあ。

一ヶ月後の婚礼については早すぎると思ってたけど、でもここでカレヴィにやっぱりが変わったとか言われたら、それはそれで困

る。

ね。それこそ、おとんとおかんに後でなんとと言われるか分からないし

わたしは困惑しながらも、市場に売られていく子牛のごとく、複雑な気分でカレヴィに手を引かれて行った。

011 憤るカレヴィ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィに、そのまま謁見の間の控え室
みたいなところまで強引に連れていかれた。

そしてカレヴィはわたしと向き合う。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

……あれ、別にわたしに怒っているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対しておまえの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかった、父と母が怒るの？」

カレヴィの思ってもいなかった言葉に、わたしは思わずぽかんと
してしまった。

「普通は、異世界などという訳の分からないところに大事な娘をや
りたくはないだろうが」

あー、普通はそうなのか。

まあ千花が言うには、うちの両親はちょっと特殊らしいし。

「……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていない
だけなんじゃないかな。だから失言みたいなことしちゃったんだと
思うし」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてることがほとんどだった
ものね。

それがいきなり威厳のあるカレヴィに意見を求められたら、それ
はうるたえるだろう。

でもまあ、あれは娘の結婚相手に対しては失言だろうけど、まご
うことなきあの二人のわたしに対する本音なんだろうな。

……そう考えると、なんだかちよつと落ち込んできた。

おとんとおかんがあの調子なのはいつものことなんだから、いい

加減わたしも慣れというか、諦めればいいのに。

でもそれでもやつぱり、この歳になっても親には認められたいんだろうか。

「それがなんだ。娘のことをあげつらうような真似をして。親なら娘の長所くらい分かっているようなものだろう」

「あー、カレヴィわたしのために憤ってくれてるんだね?」

彼に惚れるまではいかないけど、これにはちよつと感動した。

カレヴィ、なんだかんだ言っているいい人だなあ。

千花しかり、親よりも血の繋がりのない人の方が信頼できるってなんだかちよつと淋しくもあるけれど。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙っているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所って自分でも思いつかないなあ。だからうちの両親がそういう物言いになったのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言うのと、カレヴィは顎に手を当てて少し考え込んだ。
「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか? たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈?」

カレヴィの言っていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していたじゃないか」

ああ、あれね。

「いや、実際もてなかったし。だから、そう言ったただけなんだけど」
胸が大きいせいで変なセクハラはされるけど、もてた覚えは全然ない。

「それはやめろ。おまえの容姿はおまえが言うほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろう」

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィのその言葉にこくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手としては、これ以上は望むべくもないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしをほとんどやけくそで王妃に据えようとしようとしたことから、結婚に対するやる気がほとんど皆無だということが分かる。

後でわたしが千花と友達だって知って、この結婚が国益になるって理解した途端、やたら乗り気になったけどさ。

たぶん、カレヴィはわたしと同じく愛や恋というものをあまり重要視していないのかもしれない。

そんなことを漠然と考えていたら、カレヴィはわたしが頷いたことで、ほっとしたようだった。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

この世界の格好じゃないけど、一応それなりの服装をしているんだからこれでいいじゃない。

わたしは断ったけれど、カレヴィがそれを許さなかった。そして、有無を言わさない口調で言った。

「ハルカ、着替える」

カレヴィの命令で大急ぎで自分に与えられた王妃の間に戻ったわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

あ、そうだ。

そつえば、明日会社辞めるって言うに当たって、用意するものがあるんだった。

わたしがそれまでうつかり忘れていたのは、会社の人に配るお菓子。

急だったから無理かなあと思ったけれど、ゼシリアに一応言ってみたら、ご自宅に帰宅される前にはご用意致しますと言ってくれた。わあ、ゼシリア、有能すぎる。

「ありがとう。助かる」

わたしが感謝の言葉を彼女に伝えると少し困惑したようにゼシリアは言った。

「わたくしは当然のことをしたまでですから、そんなもったいないお言葉など、わたくしごときにおかけにならないください」

「いや、でも嬉しかったし。本当に助かったし、ゼシリアありがとうね」

わたしがにつこり笑って言うと、「ありがたいお言葉、ありがとうございます」と少し困ったようにゼシリアが微笑んだ。

……うーん、王妃となる身分の者はやたら侍女に礼を言うものじゃないのかな？

でも、こういうのは身分どうこうに関わらずいくら言ってもいいんじゃないかとわたしは思うんだ。

それで、支度を終えたわたしは、ゼシリアに案内されておとおかんのいる部屋に通された。すると既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんか置いてあって、それを目にしたらなかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとおかんなは真っ赤な顔でふらふらとわたしに近寄ってきた。

「おおっ！ はるか、そういう格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からないけど、おとおかんなは既

に出来上がっていた。

……なんで、よりによってこんな場所でこんなに飲んだんだ。立派なよっぱらいじゃないか！

「はるか、よくやったわ！　まさかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをあおる。

その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

まあ、彼の気持ちは分かる。

さつきまで、おとんとおかん、カレヴィに渴を入れられてたのに、それが一転してこの有様なんだもん。

「はるか、ごめん。ちよっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃって、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝ってくるけど、どう考えてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。ちよっとは自制しろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言うわりにはそのルルア酒なるものをくいくい飲んでいる。カレヴィはお酒には相当強いみたいだ。

わたしはカレヴィに促されて、彼の隣に座った。

カレヴィにルルア酒を注いでもらうと、一口それを含んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

そんなに強いお酒なら、ちよっと油断するとすぐに酔っぱらいそうだ。

そう思いながら、わたしはおいしい料理を着にルルア酒をちびちびやっていたら、またしてもおとんとおかんが寄ってきた。

「正直、おまえにはまったく期待していなかったがぁー、世の中には不思議なこともあるもんだなあー」

……うっさい、おとん。

さりげなく傷を抉るようなこと言っな。

「それもこーんなハンサムな王様とお。わたしがもうちょっと若かったら代わりたかったわ」

……もうちょっとって、それでも歳取りすぎだろう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな」

カレヴィは溜息をついてしみじみと言う。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いったいなにをやったんだ。

千花に聞くと、二人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

うわあ、変な酔っぱらいだ……。傍目にはさぞ奇妙な光景に映っただろう。

しかし、おとんとおかんに踊り癖があるなんて初めて知ったよ。

なんだかさつき二人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをうつかりあおってしまった。

そしてその後。

見事に出来上がってしまったわたしは、カレヴィを床に正座させて「政略結婚も結構だけど、そればかりっていうのはどうなの？それに、もしわたしがとんでもない不細工だったらどうしてたの？」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5607y/>

王様と喪女・改

2011年11月24日23時18分発行